

## 米 医 D・B・シモンズ

——とくに十全医院(横浜)に於ける業績  
並びに福沢諭吉との関係について——

まえがき

荒 井 保 男

ここに記すシモンズとは Duane B. Simmons のことである。

シモンズは、安政六年神奈川に來航したニューヨーク生れの宣教師兼医師である。

はじめ宣教師として立ったが、妻がユニテリアンであったことから、ミッションを離れ医師として自活し、明治四年からは十全医院の御雇外人として活躍し、晩年は福沢諭吉の知遇を得、三田山上にあつて日本主義陣營の闘士として時事新報に健筆をふるった人物である。

当時シモンズは、セメンズと呼ばれ西門士(セメンズ)(又は晒門士)とも書かれて、日本人に親しまれていた。私は横浜市立大学医学部内科教室に在局していたころ、故原田彰教授(一)よりシモンズの名を聞かされたことがあるが、僅かに私の耳朵に留めるにすぎなかった。

私がシモンズに興味を惹かれるようになったのは、一つの小さな出遭からであった。

それは、昭和五十八年十月の半ばのことであった。横浜市立大学医学部四十周年事業として、横浜市立大学医学部創立史―草創のとき―<sup>(一)</sup>を刊行することになって、「その編集の長を引き受けて欲しい」との同窓会からの依頼である。それも半年で仕上げたいと云う。私は一つの大学の歴史を編むと云うこと、それだけでも大変であるのに、短時間のうちに仕上げなければならぬ重責に、幾度か辞退しようとした。ためらい躊躇したのであるが、結局、非才をかえりみず、引き受けてしまった。引き受けた以上、「立派なものを」と文献を漁るうちに、私はシモンズに出遭ったのである。調べれば調べる程、興味のつきない人物で、いつしか私の心はシモンズに捉われていた。しかし、半年という短時間という制約のため、身近にある文献だけを中心にして書き上げてしまった関係上、出来上ったあとで、いくつかの文献が見つかり、それを通してみると、シモンズについての記事が、かなり誤りの多いのと未発表の業績の多いのに驚いたのであった。

横浜市立大学医学部の出身者でもあり、慶応義塾大学にも学んだ私は、いつしかこの両大学に関係のあるシモンズの記事の誤りを正すことが、私に課せられた責務であるかのように思えてならなかった。そして私は、出来る限りの文献を漁り、シモンズの誤りを正すとともに、シモンズの全貌を明らかにして、その全体像を描き出してみたいと願うようになっていた。

このようにして私は、シモンズ追跡の道に踏み込んでしまったのである。

不備な点もあるが、例会で発表したのを機会に、ここに今までの知見を報告し、大方の御批判、御叱正を願う次第である。

### (一) シモンズの来日

D・B・シモンズ、S・R・ブラウン (Brown, Samuel Robbins) と U・F・フルベッキ (Verbeck, Guiso Fridolin) の三人は日本に派遣された最初の米国和蘭改革派教会 (Dutch Reformed Church in America) 宣教師として安政六年 (一八五九)

五月七日日本へ向けサープライズ号でニューヨークを出帆した。

大西洋、喜望峰、インド洋、上海を経て、シモンズ、S・R・ブラウンは安政六年十一月一日神奈川に到着し、フルベッキは十一月七日長崎に着いた。<sup>(三)</sup>

ブラウンはこれら三人よりも半月前に来日していたヘボン(Hepburn, James Curtis)の住んでいる成仏寺に落ちつき、シモンズは、すぐ近くの宗興寺に住んだ。<sup>(三)</sup>

シモンズは来日の翌、万延元年(一八六〇)秋にはミッシェンを辞職してしまふ。その理由は夫人が極端なユニテリアンの信者であったことによる。ユニテリアン派は正統主義に反して、三位一体論を否定し、神格の単一性(Unity)を説くところから、この名がつけられたもので、キリストの神性を否定し人間性を強調する。後年、福沢諭吉は一種のムーヴメントと解し、「その教えの目的は人類の位を高尚にして智力の働きを自由にし、博愛を主とし一個人一家族の關係に至るまでも、之を網羅して善に向はしむるにあり<sup>(四)</sup>」と述べているが、その説くところは、ブラウンやヘボンなどのカルヴィン神学の立場とは甚しくかけ離れた自由の立場に立つものであった。

夫人は家庭では、ダンスやカルタをして一般居留民のようにはでな生活をし、シモンズもまた夫人の影響を受け、同夫妻の行動はヘボンやブラウンの目には常識では考えられないものと映ったようである。そのため、ミッシェンのとがめを受け、シモンズは宣教師を辞めてしまったのである。したがってミッシェンとシモンズの關係は甚だ短かった訳で、シモンズの苦衷が察せられる。

この辺の事情は、S・R・ブラウンの手紙が次のように伝えている。

「ドクトル・シモンズは日本人の間で医者をしてゐること以外は、だいたいわたしと同様の働きをしていますから、ここでとりたててドクトルのことを申し上げません。しかしシモンズが、ミッシェンの働きから退かなければならなかつた事情について、わたしほど心をいためているものではないでしょう。わたしは同氏の件について、ミッシェン本部のつた処

置を非難しているわけではありません。同氏が日本におけるわたしたちのミッションの宣教目的に全力を傾けつくしているとはいえません。ミッションから離れたことは、彼にとつても、つらい試験であったことは、わたしにもわかっています。また日本に福音を伝えるため、彼としては、できるだけ力をつくしたいと望んでいることもよくわかっています。<sup>(五)</sup>」  
(フリーリップ・ベルツ師あて。一八六〇年万延元年十二月三十一日)

そんなわけでシモンズは宣教師を辞めて、完全なる医師としての道を選び、居留民の医師として開業した。

文久元年（一八六二）八月一日のフリーリップ・ベルツあての、S・R・ブラウンの手紙には、「ドクトル・シモンズは医療で金をもうけ、すでに貯えた資金で自分の家を建てました。過日、ヘボン夫人の話によると、シモンズ夫妻は、ミッションの中にいるよりもそれを出てから生活が明るくなったそうです。この人たちに対して、わたしが冷たい感情を抱いていると想像しないでください。むしろその反対で、シモンズ夫妻が信仰生活と伝道の働きとをつづけてゆかれるようにわたしは好意をもってつくしております<sup>(五)</sup>」とある。

シモンズは、ミッションを辞めてしまった以上、来日に要した旅費を返却しなければならなかった。

文久二年（一八六二年）二月二十六日のフリーリップ・ベルツあてのブラウンの手紙を引用しよう。

「ドクトル・シモンズは、数か月のうちに、ミッション本部に右経費の全額を返済したいという意向です。これは現在のよるな、難局においては、ミッション会計にとって、財政上大助りでしょう。難局というのは、この地で取沙汰されているアメリカとイギリスとの戦争が起つた場合を想定してのことです。ドクトルの金額は全部で一、〇〇〇ドル以上になるだろうといっています。またドクトルは最近ミッション所属の器具類をも、一箱購入したのですがその金額は五六ドルです。近いうち、彼はわたしにその金額を支払ってくれるそうです。ドクトル・シモンズの支度金で買った手術用医療器具の価格は、高価なもののようにだと、ヘボン博士とマカルティー博士はみています。それゆえ、ここでニューヨークの相場場で売れたらその代金をこちらでうけとれるなら、そのほうがよいと思います。<sup>(五)</sup>」

又、同年十一月八日のフィリップ・ベルツあての手紙には、

「ドクトル・シモンズは、わたしに四〇〇〇ドルを支払いました。その一部はミッシェン本部に返済する金で、一部は、外科用の器具、薬箱一個などとブランドーの代金です。シモンズはミッシェンの会計として立て替えた金を、ここで払います。もどすつもりでした。」

しかし彼はミッシェン本部あてに送金することにして、先日、一、四〇〇ドルばかりの手形を振り出したと言っていました。それは彼が宣教師として任命されて以来、ミッシェンからもらった全額で、それが相当な多額なので為替にするほうが得策であったために、最初に話した支払方法を変更したのでしょうか。シモンズは近く、家を四、〇〇〇ドルで売り、家財道具を競売にかけて売り払うとのことです。負債を全部支払っても五、〇〇〇ドル以上残るでしょう。シモンズ夫人が父親の家に帰ったあとで、その後を追って帰るために家財道具いっさいを売り払って資金を作るのです。シモンズ夫人は、まったくここに愛想をつかしたようです。ドクトルもひとりのほうが早く金を作れるし、生活費もはるかに少なくすみます。危急存亡の故国の実情でドクトルの送金をあなたも喜んでおられることと存じます。<sup>(五)</sup>とある。

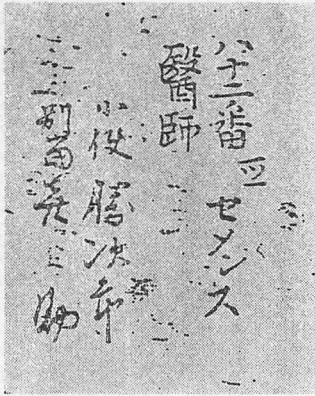


図 1

彼の医師としての開業は好評であったようである。「横浜ばなし」<sup>(六)</sup>に上図のように、シモンズのことが出てくるから文久二年には開港地横浜の八十二番（現中区山下町）に住んで医業を行っていたことが推察される。

当時、幕府の方針ですべての外国人を横浜居留地に移すことに決定しており、ヘボンも文久二年この年三十九番に新築家屋に移り住んでいる。

その後の数年間のシモンズの行動は明らかではない。

S・R・ブラウンの手紙の示すように家財道具一切を売り払って、妻のあ

とを追ってアメリカに帰国し、ドイツ・フランスに医学研究に赴いたようである。(後述)  
しかし、それがいつ出国しいつ再来日したのか判然としない。

## (二) 大学東校とシモンズ

明治新政府は富国強兵のために、西洋の文物を積極的に導入し始めた。医学の面においても、その例外ではなく、漢学を排し、西洋医学を導入することが国家の方針として決定された。その際、維新に際し大功のあった英国ウィリアム・ウィリスを長として、イギリス医学を採用する筈であった。

ところが相良知安らの建議、フルベッキの意見、国体の類似性などのことから、急遽、ドイツ医学を採用することに決定した。

ドイツ政府は早々に陸軍軍医ミュルレルと海軍軍医ホフマンを挙げて、それに応えることにしたのであるが、時あたかも普仏戦争に際し、渡来出来なかつた。

その時、精得館教師であったボードウィンが帰国のため横浜に来ていたので、大学東校ではボードウィンを教師にしようとした。しかしボードウィンは受けず、止むなく、一ヶ月間消化生理の講義をすることを承諾せしめた。

これも一時的なものであったから、遂にシモンズを招聘することにしたのである。

ところがシモンズが二人居たので、D・B・シモンズは大学東校に奉職しなかつたのではないかという疑問さえあった。

この疑問を解決し、D・B・シモンズが大学東校に奉職した事実を実証されたのは、小沢三郎氏である。<sup>(三)</sup>氏の論文を要約すると次のようである。即ち「大学東校ではアメリカに在留中のドイツ人シモンズ(O. Simmons)を雇うことにしたのであるが、着任が当時のこととして、時間がかかり遅くなるので、横浜に居た米国医師D・B・シモンズをかりに雇い、ドイツ人シモンズが到着したら退職して貰う<sup>(三)</sup>」ことにしたのである。

このプランは実行され、D・B・シモンズは約一年間大学東校に勤務し、O・シモンズと交替したのである。

大学あてに「米国医師シモンズ御雇ニ相成東校教師被仰付候事、(明治三年)三月十七日 大政官」と公文録にあることからも、D・B・シモンズが大学の教師になったことは明白である。<sup>(三)</sup>

シモンズをウイリスの代りに大学東校に推薦したのはフルベッキである。フルベッキは安政六年一緒に来日した仲間であり、当時開成学校の教頭として、政府にかなりの影響力を持っていた。旧友シモンズを推薦したのも、うなずかれる。

この史料を見出されたのも小沢三郎氏であるが、フルベッキ推薦の全文を次に掲げよう。<sup>(三)</sup>

「過日「ウリス」御暇相成候より大病院并医学校にハ今わ教師之無相決候付医学之教導種々御不都合有由ニ承り候尤普国之医師御雇相成候哉ニ茂承候得共右医師到着施治講学ニ取懸候までハ今より少くも六七月も相費可申候幸ひ弊国之医師ニテ「シモンズ」と申人有之国之学問は不及申西洋之学術ニ茂熟し且経験之覚へも有之「ハ人茂知る処ニ御座候間「ウリス」の代ニ同人暫時御雇ひ相成候得ば御為筋ニ可相成能事与存卒爾ながら申上候

同人事ハ以前横浜ニ寓居いたし其後医術執行之為仏蘭西独乙江罷越近日横浜江立戻申候且愚存ニは相応之給料ニ而右的キ役相勤候事を同人も満悦致候事上奉存候且又別ニ除りなき身分ニ御座候間普漏生之医師到着い多し候後ニ而茂御雇相成候而も不苦候其上弥御雇相成候上ハ役義ニ拘り候丈ケの事ハ勉強仕事と奉存候間不顧失礼申上候段を何分御海函奉祈候  
誠恐々々敬白

於開成所

フルベッキ

千八百七拾年一月第十二日(明治三年一月十二日)

東京大学校執事閣下」

このフルベッキの推薦状中、特に「同人事ハ以前横浜ニ寓居いたし其後医術執行の為、仏蘭西独乙江罷越近日横浜江立戻申候」という一文は注目すべきところで、これによればシモンズはフランス、ドイツへ医学修行のため洋行したことになる。

る。しかも明治三年一月十二日から数えて「近日横浜江立戻」ったのである。

既述のS・R・ブラウンの手紙(文久二年)から推測すると、シモンズは妻の帰国を追って、アメリカへ帰り、その後からフランス、ドイツへ留学したのであるうか。それが何時だったのか、慶応二年の豚屋火事の際に、シモンズの名が見えるところからすれば、その後であったのであろうか。史料のない今日、いつ出航し、いつ再来日したのか全く不明である。ともあれD・B・シモンズは大学東校に奉職し、O・シモンズの来日とともに交替したのであるが、D・B・シモンズが大学東校でどのような講義をし、どのように活動したのかは定かではない。

次に手短にO・シモンズのことに触れておきたい。

明治四年八月ミュルレル、ホフマンが来日すると、O・シモンズは大学東校の子科教師となり、ラテン語、ドイツ語、数学を教授した。明治六年、長崎の学制改革とともに長崎医学校に移り、ドイツ語、ラテン語の教師として学生の指導に当った。<sup>(七)</sup>

### (三) 十全医院とシモンズ

O・シモンズと大学東校を交替したD・B・シモンズは、お雇外国人として横浜市の十全医院に奉職した。ここで簡単に十全医院の略史を記しておきたい。

十全医院は現在の横浜市立大学医学部の前身であるが、その濫觴は慶応四年閏四月に設立された日本最初の軍陣病院である。

しかしこの病院は同年七月には江戸下谷泉橋の藤堂邸に移転してしまい、残務を整理すると横浜の軍陣病院は僅か一年ばかりで閉鎖されてしまった。

軍陣病院の恩恵に浴し、病院の必要性を身をもって体験した住民たちの間では新しい病院の設立を希望するものが多か



った。この声をいち早く採り上げたのが早矢仕有的である。

早矢仕有的らは横浜に一つの病院もないことを遺憾とし、明治四年春元弁天通り、現在の中区北仲通り六丁目に仮病院を建設した。しかし間もなく近隣からの出火にあい、不幸にも全部焼失してしまった。ここに於て当時の神奈川県権令大江卓は盛んに病院の必要を説き、太田町六丁目に土地を定めて、明治五年七月に竣工した。名づけて横浜中病院と称した。これが十全医院の前身である。しかしこれは仮病院と称すべきもので市民はこれで満足するものではなかった。盛んに本病院の設立を望む声が多く、ために大江権令はこの病院の設立費を市内の資産家に諮って協力を求めたところ、寄附勧誘に応じたるもの三井八郎右衛門はじめ二十余名で忽ちのうちに六千円余の金額が集り、之を元資として本院を設立することとなったが、この本院経営の前提として当時大学東校の御雇教師であったシモンズを教師として招聘し（月給三百二十円）、千葉鉄蔵、古谷野好、内藤三郎らを助手として病院治療事務に従事せしむることとし、建設の準備が進められた。

当時、野毛山に英語学を教授した修文館があったが、この地が病院に適することから、其建設物及び敷地を買収し、明治六年十二月太田町にあった仮病院（中病院）をここに移転し、横浜共立病院と改称した。

新病院開院後、更に内容と外観の整備充実を計り、名実共に模範的病院となつたところで、明治七年十全医院と改称した。<sup>(八)</sup>

以上十全医院創立の概略であるが、D・B・シモンズは明治四年八月には既に弁天の仮病院に関係しているのである。次の公文書がこれを証している。

『先般触渡候当港病院の儀、野毛山上江建築相成、元大学東校大助教松山棟庵、当院医官総括相成候筈ニ付、右宮繕落成迄、元弁天江仮病院取設施行相成、早矢仕有的、波多野潜哉等出頭、且一週一回に外国医セメンズ出張治療候間、病患有之者罷出、療治請可申事。』

右之通相触候間、小前末々迄不<sub>レ</sub>洩様相達し別紙令<sub>ニ</sub>請印<sub>ニ</sub>早々順達、從<sub>レ</sub>留可<sub>ニ</sub>相返<sub>ニ</sub>もの也。

辛未八月二十日

神奈川県庁<sup>(三)</sup>

この公文書に示す通り、松山棟庵が総括(院長)に、早矢仕有的、波多野潜哉が診療にあたりシモンズは週一回の出張診療していたのである。横浜沿革誌によると明治五年からは、シモンズは日曜以外午前八時から十時まで毎日診療に従事している。またこの時既に東京にも進出している。

明治五年壬申五月(一八七二年六月十四日)の東京日日新聞には報告として次の一文が載せられている。<sup>(一〇)</sup>

○報告

私儀、日本横浜ニ来テ治療ヲ施ス月年久シ。然ル処東京ニハ洋医数人在留スト雖モ、皆官ニ就ク者ナレハ、世人ノ治療専ラ成ス能ワズ。依テ或ル東京ノ医師并病ヲ苦ム人々ノ求ニ応ジ、毎土曜日午後ヨリ日曜日ノ午時マデ芝露月町江川ノ邸内限川宗悦宅へ出張致スモノナレバ、診察受タキ人ハ右日ドリニ来ルベシ。

壬申 横浜百九番在留

五月ヨリ 亞國医 セメンズ

(注・句読点は筆者による)

これにより東京の医師及び病に苦しむ人の求めにに応じて東京に出張し、治療していることが分る。特に注意すべきは日曜日(安息日)の午後まで治療していることである。当時の耶蘇教宣教師は安息日は嚴重に殊にやかましかったというから、シモンズの行動は耶蘇教から完全に脱皮していると云えよう。

「横浜開港五十年史」によれば「明治六年六月米人セメンズを月給三百二十円にて聘用し治療の事は彼に全権を与え……」とあるから六年六月からシモンズは十全医院の治療の全権が与えられたことになる。<sup>(一一)</sup>

シモンズは十全医院の看板医者であった。

同病院の次の広告がその事実を明らかに示している。<sup>(一二)</sup>

当病院ハ新鮮美麗ノ家屋ニシテ自ノ人身健康ヲ得ヘキ地位ニ造営シ患者ノ幸福及ヒ其便宜ニ向テ諸物品ヲ具備スルモノナリ○医師ハ亜米利加人ニシテ晒門士ト云、此人日本ニ居住スルヤ年既ニ久シ、故ニ能ク風儀ニ習慣シ病者ニ対スル至テ懇切ナリ、加之ズ諸病ヲ治スル其奏功著テ云フヘカラズ、殊ニ梅毒治療及ヒ眼病等ヲ治スルコト極メテ巧ニシテ、又外科ニ妙ヲ得タリ○院内ヲ分置シテ二課トス、即外来及ビ入院之ナリ、外来患者診察ヲ乞ハント欲セバ、日曜日ヲ除ノ外毎日八時ヨリ十時ノ間ニ来ルヘシ、此時間ニ来ル者ハ自在ニ治療ヲ受ルヲ得ルナリ、此制限ニ遅レテ来ル者ハ診察セサルニ非レモ、時限アルヲ以テ丁寧反復スヘカラズ、但シ遠阪ノ者ハ此例ニ非ズ、最モ貧富トモ診察料ヲ出スニ及ハズ

入院病者ハ昼夜ヲ論セス恣マ、ニ治療ヲ受ルヲ得ヘシ○入院料一日ニ付薬価共上等金一元○中等六十二錢五厘○下等三十七錢五厘

野毛山十全医院

この広告よりシモンズは、晒門士と書かれていたこと。梅毒、労咳、眼科の治療にすぐれていたこと。また外科にも優れ、患者に親切で評判のよかつたことなどが十分に察せられる。

更に彼の評判と信用とを物語る史料が明治八年九月十五日の読売新聞に出ている。(二二)

「○先日中より薬を教て呉と申される人も有ば其薬を教てやると云人も有りて節々新聞に出しますが二十も三十も薬を書くと何れがよいのかと却て迷ふ種に成ります、夫につけても薬と医師は大切のものにて容易に体をまかせ無遠慮に薬を服すと大間違が出来ますが横はまの米国人のセモンズといふ医者さまは日本に久しく居て此国の言葉もよく分り土地の様子もよく知り日本人の働工合から体の骨格万事に気をつけて居るゆえ薬の分量や養生いたしかたも日本人に適當やうに申しますから彼やうな人にか、れば大丈夫と思ひます同じ西洋の医師だとして此国へ来たての人などはやはり自分の国の人を療治する通りにやらかして薬の分量が過ぎたりまた子供などの病氣は容体が分らぬゆえ見ちがへる事も随分有ると聞ましがセモンズ先生などはそこは確てござりますから東京に居る外国人も此国の人も尊とんでかかり遠方からもわざわざ招

かれるからして先生が横浜に居られては見て貰ふ人も便利がわるいで有ろうといふ思ひつきで東京木挽町一の橋通り采女町二十六番地の隈川宗悦さんの家へ水曜日と土曜日には午後三時より出張られ（此事は日外一寸新聞に出しました水曜日は日曜日より四日め土曜日は日曜日の前日に当ります）大病人にて歩行ことが叶はねば廻診もいたされ貧乏人へは施しに診察といふ事でござります嘸人々が喜びま志やう。

これによればシモンズは日本の事情に精通し、日本人の体格特質の特徴を知って治療する名医だといふのである。往診もするし、貧乏人には施療したこともこれでわかる。

また明治八年ごろには隈川宗悦宅での治療は水曜日と土曜日の午後であったこともわかる。

セメンズの名医としての評判は大へんなものであったようで、明治十年九月三日の郵便報知は、その名医ぶりを次のように伝えている。

「○此頃横浜の十全病院へ一婦人が幼子を抱き来りて数日前楯下に遊び居たりし折り如何がなしけん小石を耳の竅へ入れ頻りに泣き叫ぶを横に寝かして種々手を尽せと出ず夫れより次第に腫れ出して是れ此の通り日夜水天宮を祈り神符を飲ますれど靈験なく今に小石は出ずして痛は日に増し腫も引かず難儀致し升れば堂かお療治をと真面目に物語れば居合はず人は可笑しさ堪へやらず窃に顔を反向るもの者も多かりしかば洋医セメンズ氏も微笑を含み直ぐに器械を取り寄せ難なく小石を挿み出して小児の掌へ載せたれば幼な心にも嬉しくやありけんニコ／＼と笑ふを見てセメンズ氏は其母に向ひ水天宮よりも此器械が沢山有難たい有りマシヤウと笑ひ興せしければ流石無智の婦人も満面に紅を注ぎて礼を述べ帰りし由。」

これはシモンズは内科ばかりでなく小外科にもすぐれていたことを示すものであるがその学識と人格を慕って各地から彼のもとに、医学を学ぶべく集り来る者が多かつたようである。

その辺の事情を次の明治九年十一月三十日の郵便報知が伝えている。

「○埼玉県下栗橋駅の医師畑谷恒と云人は殊の外家業に熱心深く此程迄横浜へ寄留して刻苦勉励され帰郷の後一途に実地研究せしか猶不疑の意もあり建自費を以て大医西門士氏を一月に二回づ、其家に招待し自ら質問し旁ら近郷近村の患者を診察せしめんと謀り既に来月は早々同氏も出張する事に決したり又其叔父畑谷□囿子は齢も傾に近けれど志は壯者に譲らず遠く家管を帯て横浜に來り晩學と雖も猶草根木皮に囿せらるるに疏るとて原書を読み始め日々十全院に通學し其女は年十二三なれど英の女教師に從て其國學に萃々汲々たるよし一家親類揃も揃て。」

シモンズは埼玉県栗橋まで出張し教授と診察に當っているのである。

また、明治九年七月五日の読売新聞は次のように報じている。(一五)

「此の間から評判の神奈川県下小田中村の小僧が天狗に徒らにされたといふ一件は、令公がいろいろと心配なされ、掛り合のもの、召あげてたゞされ、小僧喜之助はセメンズ氏が診察されると全く癲癩と神経病のために倒れさり妙な事をいひ出すのが知れて、病院で療治され、親が引きとって帰り北見方村の七右衛門と下管生村のお春は罰金をとられて済ました。」

短い報告文であるが奇怪な事件として、世間を騒がせた難問を精神病と診断し、一件落着せしめたシモンズの名医ぶりを伝えて余すところがない。シモンズの人気の程が偲ばれる。

以上は巷間の伝えるシモンズ像であるが、次に十全病院をバックとして活躍したシモンズの医学的業績について述べてみよう。

#### (1) シモンズと解剖

解剖学は医学の最も重要な基礎をなす学問である。欧州の地では文芸復興の機運が熟するとともに解剖学も亦、著しい発展をもたらした。「臓志」及び解体新書によって覚醒された我が国の医学は、二世紀半にわたる解剖学の遅れを取りも

どすべく、當為努力がなされつつ、やがて明治という新しい時代を迎えるに至る。

明治三年十月には大学東校において、屍体解剖を政府当局に要請して許可を得ており、明治四年の七月にはドイツからミュレルとホフマンの兩軍医が来日、ミュレル自らが解剖学の講義と実習をうけもっている。明治六年七月にデーニッツが来日して、初めて解剖学専門の教師を得たのである。デーニッツによって解剖学の授業の内容が大いに整ったのである。明治二年四月十六日の中外新聞は、

「四月十二日和泉橋医学所に於て人屍の解体あり、解体に外国医師の立会を差図せしことは、このたびを以て初とす。さらばこの術も今よりますます精密に至るべきなり。」<sup>(一六)</sup>と報じ、また明治五年一月の新聞雜誌は、

「昨年末中当府に於て死刑に処せられし無頼の徒、絞罪、斬罪共合はせて八十二人の屍を東校に於て解剖せり。その内十二月には死刑の者最も多くして五十三人に至れり。この科専務の官員田口和美、昼夜を廢せず生徒と共に勉励し、外国に教師の教示をうけ、骨韌帶、筋、動脈、脳及髓、脊髓、耳、内臓等を精密に解き尽せりという。医学の進歩おして知るべし。」<sup>(一七)</sup>と報じている。

屍体を解剖することは、当時においては新聞ダネになる大事件であつたのである。

このように、中央で解剖が行われているとき、シモンズは横浜の十全医院で屍体解剖を行い開業医や有志の者に懇切に説明指導している。シモンズの美挙として、明治八年十二月十八日の横浜毎日新聞は次のように、その辺の事情を伝えている。<sup>(一八)</sup>

「本港十全医院御雇「セメンズ」氏日夜医事ニ勉励シテ済生ノ術ヲ考研シ難治ノ宿痾ヲ療救シテ速カニ偉効ヲ顯スコト人々得テ知ル所ナリ。頃日(診察雜誌)(所謂病牀実験ニシテ編輯宮島氏ナリ)毎月一部ヲ刷行シテ本県下有志ノ医生ニ頒チ本院寄留ノ生徒ニ与ヘテ懇切ニ教授スル「宛カモ慈母ノ愛兒ヲ育スルガ如シ。玆ニ本月十日ヨリ官許ヲ得本院ニ於テ人体解剖ノ美挙アリ。解剖毎ニ「セメンズ」氏自ラ刀ヲ取りテ剝剔シ同業有志ヲシテ參觀セシメ局部毎ニ講論ヲ加フ。夫レ同氏ハ

元來解剖學専門ニシテ既ニ人体ヲ解視スル殆ンド四百余人ニ至リ本県御雇以來モ全身解剖三回病體解剖四回ニ及ベリ。夫レ解剖ハ医家ノ一大課目ニシテ生理ノ基本タルノ余ガ喋々吻ヲ容レザル所ナリ。然リト雖モ本県此許アルハ誠ニ我三皇國開明ノ進勢ニシテ上古比類ナキ一美事ナル全ク県官ノ厚意ト我師「セメンズ」氏ノ尽力ニヨラズンバアラズ。嗚呼我輩ノ庸技此好機會ニ値フテ胸間ノ臟雲ヲ啓クヲ得ルニ真ニ無前ノ萍遇後來ノ大慶福何モノカ之ニ加エン。今、貴社新聞ノ余白ヲ汚シテ四方同志ノ諸君ニ告ゲ共ニ祝賀ヲ仰グ。

本港黴毒病院醫務弁天通 山中喬造

これによれば、シモンズは優秀なる解剖医であつたことがわかる。十全医院において全身解剖三回、病體解剖四回行い、その際の懇切なるシモンズの教導は教えを受けた医師達の尊崇的であつたことが充分にうかがえる。シモンズの屍體解剖は民間でも評判であつたようである。明治八年十月二十八日の読売新聞には、

「昨日の新聞に出した横浜の鉄兵の娘は昨日野毛の病院にてお医者(一九)のセメンズさんが解剖されました。返すがえすも強気な娘と親たちだ」とある。

しかしセメンズは、解剖学者としてばかりでなく、病理解剖学者としても亦、すぐれていた。とくに当時最も注目されていた脚氣病について病理解剖を行い、注目すべき所見を報告し、当時の専門家より高い評価を得ている。次にその次第を述べよう。

## (2) 脚氣とシモンズ (病理解剖とシモンズ)

脚氣は江戸時代の中頃よりはやり始め、明治になると、人口の都市集中の激化と主食以外の食生活の低下とあいまって、症状も激烈で流行病の様相を呈していた。

これに対して明治十年(一八七七年)に政府は府県公立病院に命じて、その病理、病因、療法、經驗、病體解剖等につい

て報告させている。さらに十一年には東京に脚気病院を設立している。また軍部にあつては、脚気は民間よりその患者数が多く建軍以来の一大問題となつていた。海軍は海軍で、陸軍は陸軍で、独自の立場から大がかりな対策研究が行われていた。

当時、脚気の原因として、中毒説、伝染説、栄養障害説等が唱えられていた。中毒説は病理学者が唱え、伝染説は京都療病院雇外人ドイツ人シヨイベと東京大学のベルツらが、この説をとり、ドイツ留学から帰朝した緒方正規は明治十八年脚気の病原菌を発見したと報告し、これは当時ドイツ留学中の北里柴三郎によつて反論されるという有様であつた。栄養障害説は高木兼寛らが持論として強く主張してゐた。このような状態であつたから、明治初期に來日した外人医師は脚気に注目し、その研究にとりこんでゐる。シモンズもまたその一人である。シモンズは伝染説をとつてゐた。

明治二十一年一月二十九日の時事新報は脚気病審査委員報告を載せてゐる。そのなかでシモンズの脚気に関する病理解剖の研究が報告されている。当時の時代的背景やシモンズの業績を知る上で貴重な史料なので、次にその概要を記しておきたい。

#### 脚気病審査委員報告

帝国大学脚気病審査委員医科大学教授三浦守治、同助手西郷吉義、同竹崎季薫より報告せる脚気病、屍体、諸臓器顕微鏡検査成績は左の如し。

此報告は明治十八、十九及二十年中、医科大学病理学教室に於て剖検せし脚気病屍体の諸臓器鏡檢（顕微鏡検査の約語）の成績にして、固より新奇の説あるにあらず、畢竟先進の諸説を賛成し、之を反復詳説するに過ぎずと雖も自ら揣らず敢て呶々する所以のものは（第一）ベルツ氏及諸氏の剖検説或は未だ徧く我医学家の耳目に通達せざるものあらん、故に其説要を採訳し之を公にせんと欲するにあり。（第二）右に附するに聊か余等が卑見を以てし併せて同学諸氏の批評を待つにあり。



抑々我邦に於て始めて脚氣病屍体の剖検を試みたる者は、内科教師ホフマン氏の後任同ウエルニヒ氏なりとす。同氏の説に曰く「脚氣は一種の血液失調にして泰西諸病中未だ其例を見ずと雖も、其性萎黃病、悪性貧血病に相類似するものなり」と

是を以て同氏は「解屍に臨み専ら目を循環器系に注ぎ、遂に心肉の脂質変性に陥り殊に重病に在りては赤血体の小にして、多く星芒状を呈し且つ縞銭状に相隣列するの性を失する等を発見し、以て本病主要の変化と看做し又、患者生前訴ふる所の感覚異常、或は麻痺、運動不随意、或は欠如等の如きは、恐らくは脳脊髓の次急性炎症、若しくは其軟膜水腫に因するものならん」と云へり。而して遂に脚氣に *Scrophathis Perniciosa endemica* の名を附し印度地方に行はるるペリベリの一種なりと確言したり。

其後アンデルソン氏一箇の急性脚氣病にて斃れたる二十三才の男屍を開検したり。而して其要は「善良なる骨格及營養及皮膚及諸粘膜の鬱血、肺水腫、腸胃粘膜下及実質中の溢血、肝脾腎の充血、頸髓硬膜外面の出血等にして、心臓脳脊髓及神経に於ては肉眼及び装眼上著しき異変を認めず。」と云へり。

次にシモンズ氏は二回の剖検を施行し、その所載は上記と大同小異にして、唯心臓検査の件下に「心臓は著しく拡張且つ肥大し肉質は汚黄色にして、甚しく弛緩し、之を鏡検するに筋纖維既に变性の兆を呈せり、内外膜共に異常なし。」云々の語あり。

次にベルツ氏及シヨイベ氏の脚氣病報告世に出でたり。其所説精確にして実に信を措くべきものなり。然れども当時我國に於て解屍を施行すること意の如くならず就中シヨイベ氏の如きは京都に在ること三年にして僅かに五箇の病屍を解剖したるに過ぎず故に同氏著書中多くは脚氣の原因徴候経過等を精論して、其病屍解剖の点に至りては尚ほ之を後日に期したるもの如し。

氏の任滿ちて歐洲に帰船するや、ヤバ島の首府バタヴィヤに駐在すること殆ど半年にして、十有七箇のペリベリ病屍を

開検し、其諸臓器を携へ帰りライプチヒ府コーンハイム氏の病理学教室に於て、之が精細なる鏡検を遂げたり。其の成績は載せてヒルシター氏宝函第九十五号第四百六十六集にあり。ベルツ氏シヨイベ氏は脚気病屍に就て、末梢神経及び其の配下にある諸筋、該病に因て一定の状態に陥りたるを発見し、之を患者生時の諸徴候、経過原因等と相参照しアイゼンロール氏、デヨフロア氏、ライデン氏等の末梢神経炎の実験に基き、一箇の新案を立て「脚気の病症は一種伝染性の末梢神経及び筋質炎なりと断言し之より脚気に *Neuritis Multiplex endemica* 或は *Polynuritis endemica* の命名あり。」此説一たび我国に伝播るすや各家其病因たるべき黴菌を顕微鏡下に証明せんことを務め、種々の着色法を試用し嚴密の探究を施せしが、皆十分なる目的を達するを得ず在再遂に明治十八年に至りて、我大学の教授緒方氏患者の血中より一種の黴菌を採取し、之を寒天及びペプトンゲラチン培養基に種殖し又、これを諸動物に接種せしが諸徴すべて眞の脚気に適応するを以て、之を眞正の本病病原と確定し、之を脚気黴菌と命名し其性状及び其動物試験成績の如きは明治十八年四月七日及八日の官報衛生事項欄内に詳かなり。

以上説く所の如く脚気病症及其原因既に明晰なるに至り、因より疑訝を其間に容るべきものなしと雖も尚、前説を確証せんがために、本年四月来脚気屍の諸臓を檢視し左の成績を得るに至れり。

以上の如く明治二十一年一月二十九日の官報記事として記してあり、その成績は三十日、三十一日の時事新聞へと引續いて掲載されている。その詳細は本論文に関係のないため省略するが三十日の論文でシモンズの業績につき触れているのでその部分のみを記しておこう。<sup>(二〇)</sup>

「ベルツ氏は脊髓前角に於て神経細胞の変性せしが如きものを目撃せしことありと云ふ。シヨイベ氏も亦脊髓中部前角の萎縮硬結神経細胞の一半全く消失したるを実検し之を原発筋炎の致す所なりと説明せり。又シモンズ、ハミルトン、シヨイベ氏等は脊髓諸部の軟化を発見し、就中ハミルトン氏の如きは之を貴要の変化と看做すものの如し、而してシモ

ンズ、シヨイベ氏等は死後の軟化なりと断言せり」

以上の報告書に見られる如くシモンズは、脚気病死の病理解剖を行い、心筋変性を認むるなど、ベルツ、シヨイベ等の学者に伍して脚気病研究に大きな足跡を残したのである。このことはシモンズが解剖学者であるとともに、すぐれた病理学者であつたことを物語るものであらう。

### (3) シモンズと梅毒

江戸時代いらい性病の蔓延は著しきものがあつたが、これに近代的な対策が行われたのは、幕末にさかのぼる。

一八五九年(安政六年)横浜開港に伴つて花街の建設が計画され、神奈川奉行は横浜に遊女屋を作り、外国人を集め横浜の繁栄をはかつた。太田屋新田の一部の埋立地である港崎町の港崎遊廓がそれである。

一八六七年(慶応三年)イギリスの海軍軍医ニュートンの意見にしたがつて、公使パークスが政府当局を動かして、横浜吉原町に梅毒病院を開設した。その真意は横浜港に出入する外国船が多く、船員が遊廓に登楼するので、外人の性病罹患率を減少させるためであつた。梅毒病院が設けられると、掛医師、通弁水夫、定役、同心、門番、足軽などが配置された。明治元年には、松山棟庵、早矢仕有的がニュートンの助手となり週一回娼妓の検診を行っている。

明治六年遊廓が関外から高島町へ移転するとともに当病院も高島町に移り高島町病院と呼ばれた。更に明治十年十二月伊勢町三丁目戸部山に従来の高島町病院を移転した。これは野毛山の十全医院の近くであつた。

ニュートン以来英国人の干渉によつてその指導権は常に英国が握つていた。神奈川県ではその指導権を日本側に取り戻すべく、ヒルの解雇に種々努力したが徒勞に終つていた。明治十年ついにヒルを解任し、シモンズに(十全医院と共に)梅毒病院を兼務させることに成功したのである。<sup>(二二二)</sup>

前述の十全医院の広告でシモンズが特にか梅毒の治療にすぐれていることを宣伝しているが、シモンズは梅毒の治療にお

いてもすぐれた業績をあげている。明治八年十一月十日横浜毎日新聞には、初期梅毒治験と題して、シモンズの業績をた  
たえる一文がのっているので紹介しよう。<sup>(二二)</sup>

#### 初期梅毒治験

予米医「セメンズ」氏ノ説ニ随テ初期單純梅毒十九人炎性一人簇発性二人腐蝕性一人軟性下疳合計二十三人ニ「ヨヂホ  
ーム」ヲ試用セシニ皆一週ヨリ二三週ニ至テ全治ヲ得タリ。其法ハ盤内ニ華氏百度ノ温湯ヲ盛テ中ニ患者ヲ坐セシメ患部  
ヲ浸スコト一時ニシテ適宜ノ「ヨヂホーム」ヲ撒布シ一時ヲ経バ、又温浴ニ入レ毎隔時ニ斯ノ如ク更換シテ、僅ニ強壯藥  
ヲ内服セシメ「ヨヂホーム」ヲ撒布スルノ外、他ノ外敷藥ヲ要セザルナリ。此「ヨヂホーム」ハ千八百二十二年「セルリ  
アス」氏ノ發明ニ係リテ沃度加里ト塩酸石灰トヲ抱合セシメ、其内ヨリ取レルモノナリ、之ヲ初メテ醫藥ニ供セシハ、千  
八百三十七年「龍勒」府ノ医人「ローブル」氏ニシテ爾來、腺炎英吉利病、瘰癧、勞瘵、月經不調、梅毒、皮疾及ビ子宮  
癌腫等ノ主藥トス。是ヲ以テ考フルニ「ヨヂホーム」ハ当時ノ一新藥ニ非ザルモ梅毒ニ於テ諸藥効ヲ呈セシメ荏苒数月ヲ  
涉リ滋ニ体ノ衰徳ヲ促ス者ニ用ヒバ余ノ經驗ニ於テ其効ナシト云フベカラズ。依テ陋拙ヲ顧ミズ聊サカ新聞ノ余白ヲ汚ス  
ニ  
ニュートンらの、もちいた梅毒療治は一%の昇汞水であるが、シモンズは「ヨヂホーム」なる新療治であることに注目  
しなければならぬ。まことに十全医院の看板広告に偽りなしというべきであらう。

横浜 宮島義信述

#### (4) シモンズとコレラ

江戸時代には文政五年(一八二二年)並びに安政五年(一八五八年)にコレラの大流行をみ、人々にその恐しさを強く印象  
づけたが、幸いにも明治維新後は絶えて、しばらくその流行をみなかった。

ところが明治十年西南戦争中の十月、シンガポールを経て清国厦門に侵入したコレラが猖獗をきわめ、それがイギリス

軍艦によってわが国にもたらされた。これが十年十一年と続く空前の大流行となったのであるが、長崎のものは前述の如くであるが、横浜に於けるものは九月五日横浜居留地三番館の焙茶従事日本人植山藤五郎の母が最初の発病をみ、直ちに死亡したのが始まりで、千葉（十三日）東京（十四日）三重（十九日）山梨（二十四日）へと一府十一県に波及していった。

この横浜を中心としたコレラ流行の際に、シモンズはコレラ予防対策の指導的立場にあって、迅速にして適切なる特筆大書すべき活躍を演じたのである。その活躍ぶりを明治十年九月二十日の郵便報知は次のように報じている。<sup>(二三)</sup>

「横浜にては虎狼痢病の伝染益々烈しく、一昨日は港内外の病者七十人に及び其中落命せし者十七八人もあり、因て小島少記官は十全医院に詰切られ、県下一大区中にて甲乙の差別なく医者を医院へ呼上げ、是を各区へ配り銘々受持の場所を定め、総てセメンズ氏の指導に従い、警部巡査同道にて軒別に診廻り、家々へ止瀉薬と予防薬を与えて、雪隠下水の掃除迄に注意し、病人ありと云えば直ぐ治療を施し其の上絶えず町用掛を見廻らせ、其の容体を問はせ巡吏は往来にて葬送に遭えば、流行病にては無きやと聞糾す。混雑最中に又候日午前長崎県より此節コレラ流行、当所の其港へ入津の諸船五検査ありたしとの電報に因り警察官医員等を大波戸場に出張させ一々入港の船舶を改る趣。偕該病の起原聞くに、神奈川県狛師町植山藤五郎母ぢす（五十二年）が本月五日アメリカ三番館へ茶焙じに行きし帰途此病に感じ、其日直ぐに死亡したるが始まりにて、夫より茶焙じ女のみ都合十三人煩ひ付に十人程死去せしにて館主も驚き種々取調べたるに、全く館中雪隠の側にある井水を飲料にせしゆへならんとの鑑定なれば、昨今井水を遣はぬ由なり（一説に同館の蔵中に支那厦門より積込みし荷物ありたるが、夫に彼地病毒粘き来りたるならんとも云ふ）。是に就き十全医院の混雑一方ならず、一昨朝より該症の患者七八百人各々詰掛けたり、此者ハ少し許り腹痛し下痢にてもあればいでこそと駆付けたる故なりとぞ。」

（右横浜毎日新聞抜萃）

十全医院には、七八百人の患者が詰めかけるなど、その混雑ぶりは十全医院の歴史上でも未曾有のものであった事と思われるが、ここでも手際よくシモンズが指導し治療に当たったものと思われる。当然指導的立場から開業医にコレラの講義

を行つてゐる。

明治十年十一月十五日朝野新聞は、

「横浜にて九月上旬より、本月十二日迄に虎列刺病に罹りし総人数千二百二十八名にて、内死亡は六百三十五人、全治は四百四十六人、治療中の者四十七人。もはや病毒も撲滅せし故、同日より諸興行を許され、居留地の南京劇場も翌十三日より始り、打つて替つて大賑わい。」とあるから大した騒動もなく、またたく間にコレラを消滅させたことは、シモンズの適切なる処置と指導によるものであることができよう。

コレラは翌年にも再燃し、散在的に発生した。このときもシモンズが検疫に従事していることを郵便報知新聞は次の如く伝えている。<sup>(二五)</sup>

郵便報知新聞 明治十一年十月十八日

「昨朝六時十五分神戸発の汽船名護屋丸入港せしかば直ぐ検疫の爲めセモンズ氏並びに警察官吏出張して乗組人を一々改め上陸を許されたり該船の乗客は上等十六人下等二百卅八人此の船便にて第三十三国立銀行の社長も出京せり。」

明治十一年のコレラは流行と称するほどに至らなかつたが、翌明治十二年三月十四日愛媛県温泉郡魚町に初発したコレラは、またたく間に広がり空前の大流行となり朝野を驚かせた。この際のシモンズの活動ぶりを朝野新聞が次の如く伝えている。<sup>(二五)</sup>

「横浜不老町三丁目の伊藤金次郎(三十七年)は去る三十一日の朝吐瀉を催おし有りしを押し海岸三十六番館へ茶焙じに出で仕事に掛ると吐瀉益々烈しく身体忽ち疲労して終に死亡せしにより該館の支那人は大に驚き直ぐに堺町警察所へ届け出しかば早速十全病院雇外人教師セモンズ氏等出張になり死体を診察せられし処虎列刺病に罹り死亡せしに相違無ければ急ぎ死体を取片付け其の筋にて館内の茶焙じ人足の館外へ出るを禁じ残らず消毒所へ送る手当有りて後五時頃男女子供合せて百人計りを警察官が指揮して該館より五大力二艘に乗せ横須賀丸に引のせて長浦へ送られたり此の事市

中へ聞えければ子供に面会せんと喘ぎ／＼来る老親も有れば女房を見送らんと駈付ける亭主も有り中に一生の別れの如く声を揚げて泣くも有りて一方ならぬ混雑なりしと。」

(明治十二年八月三日号)

コレラの撲滅には、きめ手のなかつた当時、予防法として清潔法と避病院の運用のみに主軸をおいたのは止むを得ないところであるが、これが実施にあたって患者やその周辺の関係者の人権が全く無視されていたことや、一般大衆がコレラに対する知識の無かつたことなどから、コレラ予防の現場では到る所で大混乱が起っている。ひどいところではコレラ一揆や医師沼野玄昌の殉難事件が起っている。この点以上見て来たように、横浜の場合、予防法はすみやかに行われ、新聞紙上にて「人民の幸福これに過ぎず」と謝意を表されているのは、防疫の指導的立場にあつたシモンズの措置がいかに適切であつたかを雄弁に物語るものであらう。

#### (5) シモンズと種痘

モーニケにより牛痘法による種痘法がもたらされて痘瘡の予防に関する技術的基盤が与えられると、幕府は種痘館設置をはじめとして種痘の普及に努めた。しかし各藩ごとの、医療政策の不統一、漢方医が主であり取扱う医師の質の問題や痘苗の大量生産の問題が大きな障害となつて、その普及は遅々たるものであつた。

明治維新による統一政府の出現はこの問題を解決するのに十分な政治的条件を作り上げていた。事実、伝染病の予防は、まず種痘から始められたのである。明治三年三月大学東校に種痘館を設置し種痘規則を定め、四月には大政官布告で各府藩県令に種痘の普及を指示した。かくの如くにして、神奈川県下においても種痘の普及の基盤が与えられるのであるが、シモンズとの関係に注目しつつ横浜の種痘について一瞥しよう。

横浜では安政年間に早くも不完全ながら種痘の施術が行われていた。しかし、それは一般に普及するに至らず随所に天

然痘が流行し、勢の盛んなることも屢々であった。

明治三年十一月に極めて悪性の天然痘が流行し、そのため小児等の死亡が続出した。この時、神奈川県は御雇イギリス人医師ニュートン氏の監督の下に医師早矢任有的、松山棟庵らに命じ、横浜吉原会所（関外吉原遊廓内）と神奈川県元本陣石井源左衛門宅に出張せしめ、生後七五日以後の小児に種痘を施行せしめた。すなわちこれが我が国における公設種痘の最初である<sup>(二)</sup>と云う。尚、この種痘所開設については、当初イギリス公使パークスが居留民及び船員上陸者の衛生上の目的を以て、それとなく日本側の行政にその実施と施設を置くことをすすめたこと<sup>(二)</sup>のようである。県下各地に種痘所を設置して、ひろく種痘を実施したが、これらの費用は全部公費であった。明治四年九月になって漸くその流行は下火となり、その後は元弁天武術講習所を仮病院に充当して一ヶ所に取まとめて種痘を実施したが、翌十月に火災の為に同病院は焼失したので種痘所を附近の浅岡琳齋方に移した<sup>(二)</sup>。



図 2

かくして、明治七年七月十全医院の改築と共にその事務の一切を同院において行い、かつ同時に同院の医師シモンズ氏の

の建言にもとづいて、十全医院をもって種痘本局とし、神奈川県下全般の本籍者と寄留者を問わず、種痘を励行し又、局内には専任者二名を常置して、各地を巡回して種痘のみならずその他の病気にも対処して、万全を期した。

しかし明治六年秋から七年にかけて、次々に天然痘が流行し、その勢いは言語に絶するものであった。

ここにおいて応急策として、野毛山十全医院敷地内に附属病舎を新築して、患者を隔離し、かつ大いに種痘を励行して種痘済の者にはその証書を交付した。これこそ我が国



における種痘証発行の端をなすものである。<sup>(二)</sup>

越えて明治十年に至り、神奈川県下二十一大区において、各大区毎に種痘医一名ないし三名を配置して任に当らせ、十全医院は全県下の種痘に対して統括する責務を担った。その効績顕著なるものであったと称せられている。<sup>(三)</sup>

#### (四) シモンズの文化的業績

##### (1) シモンズと牛乳

安政六年横浜開港以来、我が国の対外貿易が漸次隆盛となつてゆくうちに、来り住む外国人も次第に多きを加えてきた。これらの移住者は横浜に乳牛牧場がないため、日常生活に非常な不自由をきたしていた。このとき、シモンズ、ヘボン、および米国婦人伝導師クロスビー女史らが指導し、牛乳を奨励したので、日本人も飲み始め煉乳、牛酪の如き乳製品に対する需要も高まってきた。維新前は口にしなかつた牛乳が滋養品として、又は病人にも保健上にも、とくに幼児の栄養飲料として家庭にも必要欠くべからざる食品であることが認識されてきたのである。

こうしたなかで我が国で最初に乳牛を飼育し搾乳を始めたのは前田留吉である。留吉と前後して、シモンズの雇人であった中川嘉兵衛も洲干（現在の北仲通六丁目）の弁財天祠附近に搾乳場を設けた。

「横浜史稿」によると、中川嘉兵衛は三河の人で徳川末期、早くも外人相手の商業に志し、外国語を修むること数年、外国人の来集する横浜に出て、一時塵芥取人夫などをして苦勞していたが、シモンズに認められて、シモンズの庸人となつたといふ。<sup>(二七)</sup>

機をみるに敏であつた中川は、牛乳の需要が今後、益々増加することであろうと考え、有望なる事業として、前述の場所に搾乳場を設けた。この牛乳は全部シモンズの許にとどけられ、饅頭となし外国人の口に供せられたという。この搾乳業も、いわゆる「豚屋火事」で大打撃をこうむり、搾乳場の全部と飼育の牛二頭とを焼失した。「シモンズはこれを聞く

や乗馬でいち早く見舞に来り、乳牛の焼失したのを見て『中川は牛の丸焼のロースを作った』と諸譚一番された」という一挿話さえ残っていると「横浜史稿」は伝えている。<sup>(二七)</sup>

告知

西洋上等家具品々  
右本月十一日午前十時居留地三十三番よ於て競  
買致し候  
二月三日

横濱 ホールン社中

むし下し  
官 許  
蚘 虫  
の 薬

一貼に付  
金二銭

但セメンエン也

右法剤の儀ハ横濱十全醫院の教師亞國大醫晒門  
士氏より傳習仕文郎省の許可を蒙り販賣能仕其  
後内務省の許可を相成追日盛大に賣弘め候處其  
良劑なる故に御愛顧の諸君日増し月に重なり繁  
榮仕候段奉拜謝候  
但し請売を御望の御方様ハ郵便を以て御報知  
被成下候ハ、不拘遠近法則書並に見本調葉速  
に御届申上候御思召に叶候ハ、御約定申上候  
也 東京府下小石川餌指町十七番地  
救命堂 千代 萬平

福澤諭吉著

福澤文集

全二冊

櫻田本郷町六番地

書肆

松岡屋榮造

図 3 虫下しの広告

(2) シモンズとセメンエン

シモンズが駆虫剤セメンエンを創始したことは有名である。

明治十一年二月四日の郵便報知新聞は広告欄に次のように記している。<sup>(二八)</sup>

むし下し  
官 許  
蚘 虫  
の 薬

一貼に付  
金二銭

但セメンエン也

右法剤の儀ハ横濱十全醫院の教師亞國大医晒門士氏より伝習仕文  
郎省の許可を蒙り販賣罷仕其後内務省の許可に相成追日盛大に売  
弘め候処其良劑なる故に御愛顧の諸君日増し月に重なり繁榮仕候  
段奉拜謝候

但し請売を御望の御方様ハ郵便を以て御報知被成下候ハ、不拘  
遠近法則書並に見本調葉速に御届申上候御思召に叶候ハ、御約  
定申上候也

東京府下小石川餌指町十七番地

シモンズがセメンエンと関係のあることはこの史料より明らかであるが、大滝紀雄博士は「かながわ医療史探訪」の中で次のように述べている。(二)

「シモンズはセメンズとも呼ばれ、漢字で晒門士とも書かれた。当時虫下しセメンエンが用いられ、これは非常に有効であったので誰いうとなくシモンズの処方した薬ということになったのであろう。しかしこれは事実と違うようである。セメンはシモンズ来日以前から日本の文献に記載されていた。Semen-China（撰綿支那）の略である。支那から伝わったので支那のタネと呼ばれたのかも知れない。有効成分はサントニンであり、これが抽出されたのは一八三一年（天保二年）といわれる。セメン円とはサントニンの抽出エキスで作った赤い虫下し丸薬のことでシモンズとは語呂は似ているが直接の関係はなさそうである。セメンシーナ丸として発売されてもいた」

大滝説の通りであろうが語呂が似ているところから、製薬販売会社が名医シモンズの名声を利用することを考え出したとしても、なんら不思議ではあるまい。恐らくは製薬会社がシモンズに、なんらかの手を加えさせて、その知名度を利用したのではなからうか。



図 4

(3) シモンズと薬用石鹼

シモンズ直伝とされる薬用石鹼がある。上の写真は、大滝紀雄先生によって広く紹介された内藤記念くすり博物館所蔵のものであるが、「しつのしやぼん」という引札（宣伝チラシ）である。

上段にカイセン虫が「しつの虫」として牝牡区別してえがか

れているが誤って牡の虫の方が大きいようである。下段には英文で ITCH SOAP と書かれ、下段右側には亜国大医セメンズ先生直伝と記されている。しゃぼんを用いれば瘡痒が治るということであろう。

中西淳朗博士は「薬用石鹼」の第一号と考えておられるが、<sup>(二九)</sup> 当を得た解釈であろう。

(4) シモンズと診薙雑誌の発行、その他

明治八年十二月十八日の横浜毎日新聞にみられるように、シモンズは臨床実験雑誌である「診薙雑誌」を刷行して、県下の医師、医生に頒ち与えて、教育指導の実践を行っている。<sup>(二八)</sup>

上の写真は明治八年在京の漢方医に、西洋医学を教えるため、シモンズの書籍を配布するという県令からの通達書である。<sup>(三〇)</sup> シモンズの著述もあることが知られる通達書である。

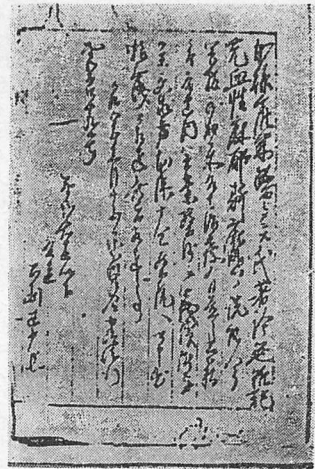


図 5 セメンズ氏著書配布の通達書 (明治 8 年 12 月 18 日) (彦坂氏蔵)

(五) まぼろしの医学校

私はシモンズ文献集蒐中に、はからずも次のような文献<sup>(三一)</sup>に接することができた。

「従来神奈川県公立十全医院雇医ニ有之。明治九年八月三十一日ニ於テ雇期満候ニ付、猶引継雇入ベキ処、現今医学校ヲ設立シ同氏ヲシテ教頭職兼務可為致見込有之。校則取調中タルヲ以テ同氏示談ノ上当前之通ニテ十全医院ニ出頭施術致シ居候得共、未ダ雇入免状下付之儀上申ス可キ都合ニ不至候事」(神奈川県権令・外務大少丞御中・一〇年一月二日)

(資料御雇外人)

この文書を読むと明治九年八月三十一日を以てシモンズの雇用期間が切れること、シモンズを教頭として、横浜に医学校設立の見込あり、校則取調べ中であることが分る。

この事実を明らかにしたのは、横浜市西区の大滝紀雄博士である。

同博士は『神奈川県医師会史』のなかで、そのことを次のように述べておられる。<sup>(三三)</sup>

「明治九年頃横浜に医学校を設立したという事実は何の医史学書を開いても書いてない。それでは計画だけがあったのだろうか。そうとすれば何時頃何処へ建てる予定であったのか。この疑問を氷解してくれたのは、神奈川県史料五巻四一五―四一七頁の記事である。

これによると、野毛山の十全病院は元來、英語学校（修文館）であったのを改造したため、病院としては構造が適していない。また加えるに建物が老朽化している。たまたま山手元英国南屯所にある不用の建物があるが、これを無償で払い下げて欲しい。そこに医学校を設立したいという伺い書を明治九年十二月六日に出している。それに対して難色を示されたが、十月七日になって昨年は医学校を山手に建てる予定だったが、医学生を東大に依頼したため建築は見合わせ。そのかわり現在の野毛山十全病院を建てなおすために、官舎その他を売りたいから一坪十銭余りで買って貰いたい。という希望を提出した。この伺いが承諾されたため、神奈川県では資金を得て、十全病院を建てなおすことになったのである。

歴史とはほんの些細な偶然が思わぬ展開をするものである。医学生を東京大学に依頼せず横浜病院で実施していたならば、横浜には一世紀も前の明治十年頃医学校が出来て、わが国の医学教育史はかなり趣が違っていたかも知れない。<sup>(三二)</sup>

次に多少長くなるがこの史実は重要なことなので資料の全文を紹介しておこう。<sup>(三二)</sup>

当地十全病院之儀ハ元横浜太田町六丁目大野平三郎所持家屋借受開設後右ハ便宜ニ寄り野毛阪脇元修文館へ転院今日迄

治療致シ来候処素ヨリ同館ハ英語学生徒ヲ教授スル為ニ設立候ニ付間取其外頗ル病院ニ適當不致因テ今般医学校設立ノ見込ニ付テハ右病院ヲ以医学校ニ振替更ニ病院建築致度処建築費支出ニ至テ困難ノ事情有之且高島町梅毒病院之儀モ借家ニシテ月々若干ノ家賃ヲ払ヒ殊ニ現今入院ノ病者モ追々増殖致候ニ付家屋狹隘ニナリ不都合不尠加ルニ家屋大破ニ及候間他ヘ建築致度見込之処是又建築費ニ差支然ルニ山ノ手外国人居留地中元英国屯所ト相唱候別紙絵図面之場処同国兵隊引込後返付ニ付家屋代価地坪ニ割当外国人ヘ可貸渡積リ昨八年十二月十四日附ヲ以相伺候処本年二月十五日附ニテ地所ハ競貸家屋ハ競売ニ可取計旨御指令済ニ付現場ヘ道路新開之上競売施行可致積ノ処現今外国人居留地之景況不宜且家屋ハ元英国兵隊屯集ノ節兵器並食物等入置候由ニテ建物都テ粗悪ニ候ヘトモ家屋地所共ニ望人無之尤地所ハ望人モ可有之候ヘトモ家屋存在ノ為メニ却テ無之様相見ヘ此上土地ノ景況見合セ候内ニハ追々破壊及上殊ニ存在中ハ番人等附置候儀ニテ御不益不少ト憂慮ノ折柄幸ニ前記病院之儀ハ一般公同ノ為メニ建築之者ニ候ヘハ無用ヲ以有用ニ換ヘ候儀ニテ至極ノ都合ト存候間右家屋ハ無代価ニテ医院建築ノタメニ御下渡相成候様致度当地所競売之儀ハ山手普通ノ競元代ヲ以テ施行候様致度候此段相伺候也。

明治九年十二月六日

神奈川県権令 野村 靖

内務卿大久保利通殿

指令

書面之趣聞届建家無代価下渡候条地所処分之儀取調可申出事

内務卿大久保利通代理

内務少輔 前島 密

明治十年二月十五日

一 坪数千二百七拾九坪壹合壹勺

官地其外敷地割余地所之内拾二個所

此地価 金百二拾九円八錢二厘

但壹坪ニ付平均金拾錢九毛壹五余

右ハ去ル明治八年十一月第千三百五拾号伺濟ヲ以官舎其外敷地トシテ御買上取計候地所之内全ク不用ニ属シ需用ノ目途無之分伺之上入札払可取計地処拾四ヶ所坪数二千五拾九坪六合四勺有之昨九年当中当港へ医学校設立之見込有之候ニ付同校資本ノ補助ニ右地所無代価御下附之儀同年十一月并十二月中相伺候処御聞届難相成旨御指令有之然ルニ医学生徒之儀今般東京大学医学部へ差出教育方及依頼候ニ付テハ医学校設立之儀ハ相見合依テハ当県公立十全医院之儀資本薄微ニシテ永久維持之方法モ相立兼候ニ付テハ右地所ノ内別紙絵図面ノ通拾二ヶ所前記之通見積代価ヲ以該病院へ御払下相成候様仕度尤地所ハ先般モ申上候通何レモ割余零碎ノ空地ニシテ他へ入札御取計候トモ格別ノ価格モ有之間敷旁該病院へ御払下相成候へハ資本補助ノ一端ト相成永久ノ公益ニモ可有之ト存候間至急何分ノ御指令相成候様仕度仍テ地所絵図面相添此段相伺申候以上

明治十年七月十九日

神奈川権令 野村 靖

内務卿大久保利通殿代理

内務少輔 前島 密殿

指令

書面之趣聞届候条地所成規之通取計地代金百貳拾九円八錢貳厘大藏省出納局へ可相納事

明治十年八月七日

資料は以上のようなのであるが、名医シモンズを教頭としての医学校である。もしこの医学校の構想が実現していたら、横浜が日本医学史上に果たした役割は極めて大きく、かつ横浜の文化も大きく変っていたに違いない。

しかし、この構想が真に実現するのは、四分の三世紀の歳月を待たなければならなかったのである。

(六) 福沢諭吉とシモンズ

明治三年シモンズ三十六歳、この年シモンズにとって後年、明治文化史上に特異の足跡を残すに至る特筆すべき機縁が生じた。福沢諭吉との親交である。

この年、福沢が発疹チブスにかかり、文字通り生死の間をさまよった。この時、福沢の一命を救ったのが、ドクトル・シモンズであった。

朝吹英治の談話によれば、五月五日に一太郎、捨次郎の二子を伴い、水天宮の祭礼に行き帰宅してから、悪寒発熱して病床に就いたと云われるが、摂州三田藩主、九鬼義隆に宛てた書簡から推して、五月十五日頃がその発病と思われる。

福沢は九鬼氏あての明治三年十月十四日の手紙で、病中たびたびの見舞に対する礼を述べ、病後気分がすぐれず、手紙をしたためることが出来ず、今日までの御無沙汰を謝したあとで、「(三三) 当五月中旬より悪性の熱病に罹り、五月廿日頃より

六月七、八日までの間は人事不省、五月晦日頃は逆も生路も無之模様<sup>(三三)</sup>に御座候処、医薬の功を奏し、幸に今日の全快に及候次第に御座候。仮に三、四年前此大患に罹候義も御座候はゞ万々全快を望むべきにあらず候得共、今日此都下に居り、此良医の治療を蒙り、此良友の介抱を受け、始て此全快を取り候義、所謝は医師と社中の朋友に御座候。医師はアメリカ人セメンズ英人ウエルス兩人を頼み、療法頗る新奇、日本の医師は伊東玄伯、石井謙道、島村鼎甫、隈川宗悦、此外に横浜の友医早矢仕有的専ら苦心いたし呉、先づ日本にては最上の治療を施し候事に御座候<sup>(三三)</sup>。」とある。



これを見て、五月十五日頃発病し臥床したことがわかる。治療にあたった医師団は、当時随一の名医ばかりでこれ以上の治療は求めても得られるものではなく、諭吉の人柄と交友の広さが窺われる。

ところで諭吉の罹った悪性の熱病は何であつたらうか。富田正文慶大名誉博士は種々の文献的考察から発疹チブスであると断定しておられる。<sup>(三四)</sup>

事実、諭吉は後述の「ドクトル・セメンズを弔す」の文中で「今を去る二十年前、身熱病に罹りてドクトルの治療を受けたることあり。当時の事情を案するに、病症は発疹チブスと申し頗る危険なる容体にて……」<sup>(三五)</sup>と自ら述べている。

九鬼義隆あての文書にも、「二、四年前此大患に罹儀も御座候はは」などと記しているが大阪の緒方塾在塾中に腸チブスに諭吉はかかっているのである。医師でなかつた諭吉は腸チブスと発疹チブスを混同している節がある。(福翁自伝では腸室扶斯といっている)

腸チブスならば、免疫性の獲得から二度と罹らないか、罹患しても二度目の症状は極めて軽い筈で、二度目の方が重症であるのは腸チブスの再患でないことを示すものである。ところで福沢ともあろうものが、戦争でもないのにシラミの媒介による発疹チブスに、どのようにして感染したのであろうか。前述の富田博士は福翁自伝にも緒方塾では「シラミは塾中永住の動物」という記述もあり、池田弥三郎によれば「シラミとサムライに恐れて江戸の住居ならず」という謠もあるくらいで「伊勢屋稲荷に犬の糞」と並んで、シラミは江戸の名物とされていたようである。諭吉が二人の男の子を連れて水天宮の人ごみの中を揉まれて歩いたときにリケッチアにとりつかれた可能性は十分に考えられる。<sup>(三四)</sup>

ともあれ、諭吉重態のニュースは洋学者仲間ですぐ知れ渡り、友人の医者達が駆けつけて、さまざまな手当法を指図するが、それぞれの説が違うので小幡篤次郎はいずれの説に従つたらよいか当惑したという。そこで当時有名な外国医師に診て貰うことになつたのである。当時有名な外国医師は、ヘボンとシモンズの兩人であつた。最初はヘボンの来診を求めようとして、小幡甚三郎がこれを迎えにいったところへボンはさしつかえがあつて来られないので、その代りにシモンズ

を紹介してくれた。ところが医療費は往復の旅費の外に一回の診察料五十両というので小幡は大いに驚いたが、先生の生命には代えられないので匆々にその来診を求めることにしたといふ。<sup>(三六)</sup>

恐らくヘボンが眼科医であったから、自分よりも内科的にすぐれているシモンズを、さしつかえがあるというのを理由として、推薦したのである。シモンズはヨーロッパから新知識を持って帰ったばかりであった。

「来診、直ちに方を処し其の要は唯大に滋養を与えて興奮品を用ふ可しと云ふに在り。

今より考ふれば熱病の処方には当然奇ならずと諸君の中には思はるる方もあらんなれども、当時の事情に於て、人事不省に陥りたる衰弱患者にソップを口に灌<sup>そそぎ</sup>込み、ブランデーを飲ましむるなどは、中々容易ならざることにして……」と諭吉は後年、大日本私立衛生会に於けるドクトル・シモンズ追悼会の演説で述べている。

その時の処方を早矢仕有的と近藤良薫が克明に書き留めている。次にその処方を記しておこう。<sup>(三七)</sup>

全文は長いので、その一部分のみを記したい。

処 劑 誌 (明治三年五月〜六月)

〔註 明治三年福沢が腸チフスに罹ったときの主治医早矢仕有的、近藤良薫の調剤記録である。福沢の病気の経過と当時の処方とが窺はれる。半紙十四枚を仮綴ぢし、表紙中央に「処劑誌」同左隅に小さく「五月廿六日より」と記し、本文は第二枚目より第十枚目まで毛筆で記されてある。〕

五月五日頃より前徴ありし

同十五日発病

五月廿六日セメンズ氏来診処方左の如し

塩酸剤

塩酸

おんす  
一五三

水 七匁

シロップ 三匁

右調勺一度に半匁づゝ用ゆ但し三時毎に用て二昼夜一日の量

○右の調劑酸強く患者之を悪むが故に此劑半匁シロップ半匁を合して用へたり

キニーネ丸

キニーネ 一匁

右糖を以て二十九となし毎三時に右の塩酸劑を以て用ゆべし○但し二昼夜一日の量

プロマイドポットアス劑

プロマイドポットアス 六トニリ五毛 水一匁

右調勺患者安靜ならざる時一度に一匁づゝ用ゆべし

飲料

每一時にミルク スープ 鶏卵劑の三品を隔服すべし○但し ミルク スープ各一匁中何れえもウキスキー酒一匁づ

ゝを加へ用ゆること

鶏卵飲料

鶏卵 一個 ウキスキー酒 三匁

右混和三度に分服す

右三種の飲料中加ふる所のウキスキー酒一昼夜の全量二匁

○シロップの方

砂糖 三十四錢 水 五匁半

○漿粉汁の方

漿粉 百二十けん匁 餛水 十多

右徐々に水を加へて攪和し手を住めず攪拌し煮ること数ミニュート冷て後服用す

さて、この時論吉の高熱を冷やすのに氷が必要であったが、この氷は横浜で函館の天然の固い氷を船でとり寄せて売っているのを、人を派して買ひとり徹夜で新銭座まで運んだということである。(三六)

前述の中川嘉兵衛はへボンに医療用や食品保存用として氷の重要性を説かれ、一念発起して製氷事業に進むに至るが、明治元年横浜元町に氷室を作り、北海道函館の氷を英国船を雇って運び、「函館氷」として売り大いにもはやされたというから、論吉の解熱に用いられた氷も、この中川嘉兵衛の「函館氷」と思われる。(三七)

またシモンズの処方にはミルクとスープと鶏卵剤とに同量のウイスキーを加えて与えるよう指示してあったので、その牛乳を買うのに真夏のこととて手桶の水に牛乳瓶を漬けて築地居留地の牛馬会社から新銭座まで、塾生達がリレーで運んだという。(三八)

シモンズらの治療が効を奏し病が癒えたといえ、論吉の体は思うようではなかった。前述の九鬼氏宛の手紙のなかで  
(明治三年十月十四日)、

「私儀、発病より今日まで丁度百五十日に相成候得共、今以読書の気力無御座、未だ嚴冬にも至らず早既に寒氣に恐れ。フラネルに体を包み閉居仕居候位の次第、御憐察可被成下候。九月初旬の比、一友医の説に従ひ、熱海の湯治思立、家内一同召連れ、先方へ二週間滞留、当月十日帰府仕候。旅行の為め少しは壯健を覚へ、手紙拝認候事は押々出来申候。何れ当年中も空に消日いたし不申ては真の全快には至り申間敷、毎日肉食牛乳等相用、養生のみに心掛居候。」と記しており(三九)  
全快への道は難渋を極めたようである。福翁自伝では、

「慶応義塾が芝の新銭座を去って三田のただいまのところに移ったのは、明治四年これも塾の一大改革ですから、一通り

語りましょう。その前年五月、私がひどい熱病にかかり、病後神経が過敏になったせいか、新銭座の地所が何か臭いように鼻に感じる。また事実湿地でもあるから、どこかに引き移りたいと思ひ、飯倉の方に相当の売家を捜し出してほぼ相談をきめようとするとときに、塾の人の申すに、福沢が塾を棄てて他に移るなら塾も一緒に移ろうという説が起(三九)つて……」と語っている。

これらより、発疹チブスが慶応義塾を芝新銭座から三田に移らせたと言つても過言ではない。

福沢のいう塾の一大改革に、発疹チブスが関与していたこと、その発疹チブスの危機を救つたのがシモンズであったこと、またこれを機としてシモンズが福沢の知遇を得るに至つたことなどを考えると、これらは、まさに奇しき縁というべきであらう。

## (七) 日本に於ける英米医学の展開とシモンズ

### (1) ドイツ医学の採用

明治新政府は、漢方医学を排し西洋医学を導入することを、国家の方針として決定したこと、その際、維新に大功のあつた、ウィリアム・ウィリスを長として、イギリス医学を採用する筈であつたについては既に述べたところである。

土佐の旧藩主、山内容堂や薩摩の大久保利通はウィリスと「全国医師の主座たるべき口約束させていた」といわれる。この政府案をしりぞけて、遠大な理想をもつてドイツ医学の採用を主張し、実現させたのが相良知安(一八三六—一九〇六)であるといわれる。

その理由は、従来吾が国で多く読まれてきたオランダ医書は、ドイツ医学の原本を訳したものが多かつたこと、ドイツ医学は当時の世界で冠絶する隆盛を示していたこと、江戸時代に最も大きな影響を及ぼしたシーボルトがドイツ人であつたことなどがその理由の主な部分であつた。

しかしドイツ医学に踏み切った理由にはそれ以上のものがあつたと思われる。

相良知安の意見書として伝うる所の理由七項目(四〇)にみられるように、プロシヤの立憲君主政体に維新政府首脳部が心ひかれたことも、大きな理由の一つであつたに違いない。

ドイツ医学の採用が国是と決定されると、官民こぞつてドイツ医学を採用、医学界はまさにドイツ一辺倒になつてしまつた。それが良いとなれば、それにすべて傾いて他は顧みないというのが日本人の習性であるが、このドイツ医学一辺倒の趨勢を最も嘆き憂いたのが福沢諭吉であつた。

## (2) 慶応義塾医学所とシモンズ

福沢諭吉はもとと大阪の蘭医、緒方洪庵に学びその読書の大部分が医書であつたことや同門に医師が多いことなどから、環境のしからしむるところ、自然に医学に興味を感じるようになっていた。

福沢は漢学を嫌つたが、漢方医学もまた打倒せねばならぬものであり、ただ単にそれを排斥するだけではなく、濟世救民の道を開くには、是非西洋医学を以てせねばならぬと考へていた。

明治四年三田に移つて、いよいよ諸事業の発展に向いつつあるとき、明治六年十月福沢は義塾構内に松山棟庵を所長として慶応医学所を設立した。

しかも英米の文明を重んじ、すべて英語による医学所を設立したのである。石河幹明著『福沢諭吉伝』第二巻に次のような所説がある。

「医学所の開設は固より西洋流の医学生養成のためであつたが、其学則の制定に就いては自ら特殊の主義があつた。それは英米の原書即ち英語を以て医学を教えるということである。日本の官界には其頃からドイツ崇拜の風があつて、殊に医学はドイツに限るといふことになり、留学生はドイツに遣り教師はドイツ人を雇入れるというに對し、先生は医学も亦、

英米の書によって学ぶべしとの論であつて、松山棟庵、安藤正胤等の義塾出身の医師は、いづれも英書によって学んだのであるから、医学所の学科も英書によって教授しようといふ趣旨であつた。<sup>(三六)</sup>

時流に逆つて福沢が英語による医学所を設立したことについて、北里文太郎氏は福沢に親炙した富田正文、松山誠二氏（松山棟庵の甥）に親しく接して質問してそれらを総合して次のように述べておられる。（慶応義塾医学所 日本医史学雑誌・昭和十七年）

福沢先生の議論は

- (一) 西洋の文明をとりいれなければならぬこと。
  - (二) 西洋文明輸入に邪魔になるような不都合なものは、どしどし征伐してしまふこと。
  - (三) ひとしく西洋、西洋といつても西洋のなかで特に英米の文明に則るべきこと。
- この三ヶ条に要約できるとしている。<sup>(四一)</sup>

慶応医学所に関しては北里文太郎氏の詳細な研究（日本医史学雑誌昭和十七年十一月・十二月号）があるので、その消長については、ここで触れないが予科と本科に分れ、当然臨床講義が必要となつてくる。その多くは三田の尊生堂医院（松山棟庵経営）の傍聴生となつて教えを受けたのであるが、臨床講義を受けもつていたのが松山棟庵、杉田玄瑞、隈川宗悦、英国医フオールズ、米医シモンズらであつた。シモンズは芝露月町江川邸内なる隈川宗悦宅へ土曜日の午後と日曜日に、横浜から出張して診療していたから、<sup>(四二)</sup>ここで臨床講義を行い学生に教えていたのではあるまいか。

シモンズは前述のように福沢とは生涯の友として肝胆相照らした仲であつたから、恐らくこの慶応義塾医学所の開設にも相談され、深いかかわりがあつたのではなからうか。

福沢はこの医学所開設には松山棟庵はじめ多くのすぐれた医師を友人として有しているが、シモンズが存在もまた大きく脳裡にあつて、かなりの成功の自信を秘めていたのではあるまいか。

医学所の学生は最盛期には百名内外に達したといい、明治十三年までに三百余名の卒業生を送り出している。

しかし乍ら明治十三年頃となると医学の教育もいよいよ精密を要し、解剖屍体、種々なる医科器械、病院の設立等、到底私立の医学所の資力の及ばぬ条件を装置せねばならない状態となってきた。のみならずこの慶応義塾医学所を卒業しただけでは、直ちに医師として治療を行うことができず、更に医術開業試験を受けねばならぬことから、来たり学ぶ者も少くなり、各地にも官公立の医学校や済生学舎ができたこともあって、むしろ閉校するにしかずということになり、慶応義塾医学所は、明治十三年六月に廃校するところとなった。はからずもシモンズが十全医院を辞したのもこの年の三月であった。

のち松山棟庵、隈川宗悦ら、慶応義塾医学所関係者が志を合わせて、英米医学を以て医師を養成する成医会（慈恵会医科大学の濫觴）を作るのである。

福沢の理想は、皮肉なことに慶応義塾大学医学部に受けつがれずに、反って慈恵会医科大学に伝わることとなったのである。

### (3) 成医会とシモンズ

#### ① 共立病院とシモンズ

福沢諭吉と志を同うし、社会の情勢がドイツ医学に走りつつあるとき、英米医学に抛り、それを固守したもう一人の人物がいる。松山棟庵である。棟庵は明治二年慶応義塾に入塾した。二十八歳のときであった。

明治四年大学の徴に応じ、大学大助教従七位、東校勤務を命ぜられ、月給七十円を給付された。しかし前述の如く明治四年、相良、岩佐らの建議によりドイツ医学が採用され、大学の大改革が断行されるや、棟庵はドイツ医学に転身するのを潔しとせず、十一月に辞職してしまつた。(四二)



この年その後、福沢の依頼を受けて慶応義塾医学所を開設した。これもいろいろな理由で結局、挫折してしまつた次第は前章で述べた通りである。

明治十年棟庵は、本格的に医術開業を始めた。慶応義塾医学所の廃校を決意したのも、この年であつたといわれる。

この年（十年）十月に棟庵は同志と相計つて、麴町有楽町三丁目一番地（旧島原侯松平忠和の邸跡）に共立病院を興した。この病院はその内容や診療科規定など現在のところ明らかではない。棟庵はこの病院の創立前に、隈川宗悦と相計つて銀座に眼科病院を開き、シモンズを招聘した。

当時のその模様を横浜毎日新聞（明治九年十一月二十日発行一八〇〇号）は次のように報じている。（四三）

「本港十全医院お雇米国医師セモンズ先生は松山、隈川、両氏と謀り此頃東京尾張町へ眼科病院を設けられ、一月に三回程出張なして治療を施さるる由、過日他の新聞紙に往々記載なりしが、諸紙一覧の人々或は同氏十全医院を去り断然東京に居を移し専ら彼の病院に従事せらるる者と誤謬の風評も有る由なれど、決して然る訳にはあらず、一ヶ月三回の定日にも午後二時三十分より本港を発、東京に到られ、同七時にはかならず帰港せられ総て今迄通り本港に寄留致されるところの事。」

シモンズが横浜に於て、その術と人徳の故に、いかに人気があつたかを伝える報道でもある。又、この文章ではシモンズが松山、隈川と相計つたことになつて注目にしたい。またシモンズが優れた眼科医でもあつたことも、これから窺い知ることができる。

のちこの尾張町眼科医院は前述の共立病院創立とともに廃止し同病院に合併した。明治十一年十月八日の東京日々新聞（四四）に次の如く掲載されている。

#### 共立病院

来る二十四日より内外諸入院せしめ且外来診療す。従来の尾張町医院を合併したれば同病院にて治療の病者は本院にて

今般我輩同心協力シテ啟者屋橋門内有地  
町三丁目一番地へ官許ヲ得テ一ノ病院ヲ設  
立シ名ケテ東京共立病院ト掲フ今二十四日  
ヨリ開院内外科ノ諸病者ヲ入院セシメ且  
外來患者ノ診察ヲモ爲スベシ此之是哉  
外科醫院ヲ該院合併シテ此迄眼科醫院へ  
依頼ノ患者ハ當院へ來診ヲ請フベシ

診察時間  
 一 每日午前八時ヨリ  
 一 第十時マデ  
 一 每日午後第二時ヨリ  
 一 第四時マデ  
 一 毎土曜日前午  
 一 第十時ヨリ十二時迄  
 一 毎水曜日毎土曜日  
 一 午後第三時ヨリ

有樂町三丁目一番地  
 赤國醫セメンス氏  
 東京共立病院

小生我輩來工業機器ノ學ニ長テ三十年間ノ  
 経験ヲ經テ今其技ヲ實忘レ使用シ諸工機ヲ  
 監督シ起シ圖ヲ製シ器機ノ使用法ヲ口授チ  
 諸工ノ差違ヲ成シ質問ヲ受クヘシ右ノ知  
 上愛顧ヲ垂ルハノ諸君アラバ(キ、ユ、ム)  
 ト宛名シテ書簡ヲ東京日日新聞日報社迄  
 投寄アラントシテ希望ス

図 6 東京共立病院の広告

治療す。

毎日午前八時より十時まで

宮川省軒  
新宮諒園

毎日午後二時より四時まで

松山棟庵  
隈川宗悦

安藤正胤

毎土曜日午前

杉田玄端  
セ・メ・ン・ズ

毎水曜日午後三時より

隈川宗悦は幕府の医官であったが維新後帰農し、後横浜に出てシモンズに学んだ人である。師弟の間柄で常に行動を共にしている。

これからも明らかのように治療にたずさわる医師の多くは慶応義塾医学所に関係ある人達である。

この病院は翌年十二年四月を限りとして閉院した。これと云った閉院の理由が見当たらないが恐らく各医師が、自らの業務を持ち、その傍らの通勤で、しかも遠距離のため当病院に通勤治療に当るについては、当時未だ交通機関が発達せず、不便の故をもって永続しなかったのではあるまいか。当時としては名医を擁しての画期的な計画であったが、「共立」ということが時期早尚であったのであろう。

④ 成医学会とシモンズ

松山棟庵は大きな挫折を味っていた。一つは高邁な理想を掲げて出発した東京医学会社の衰運であり、その二は福沢論

吉と共に興した慶応義塾医学部の廃校であった。その三は共立病院の廃院であった。このとき棟庵の前に高木兼寛が現れたのである。

高木兼寛はイギリス留学を終えて帰国するや間もなく明治十三年（一八八〇年）十二月十日海軍病院長に就任した。

この頃高木兼寛と松山棟庵の出会いがあったのである。恐らくは彼の上司であった戸塚文海が東京医学会社の社員であった関係で紹介を受けたのであろうといわれる。<sup>(四五)</sup>この時棟庵は、幾重もの挫折感を兼寛に向って吐露し、大いに慨嘆したものと推測される。一方兼寛は宿願を果して帰国して、ひしひしと膚に感ずるものは滔々たるドイツ医学の流れと廃絶に近い英米医学の現状であった。

かくて二人が到達した結論は「今や日本の土壌に健全な形の欧州医学の萌芽を生育させるためには、ドイツ医学の導入もさることながら、英米医学の軽視は絶対に許せぬということであった。」<sup>(四五)</sup>（東京慈恵会百年史）

明治十三年十二月高木兼寛と松山棟庵は協力して成医会設立の趣意書を二十数名の医家に送付した。

明治十四年一月七日趣旨に賛同して東京医学会社に集った同志の医師は首唱者のほか十八名であった。この会合で仮規則が定められ、これに基いて役員選挙を行い会長に高木兼寛、幹事に松山棟庵、隈川宗悦、新宮凌園、田代基徳が選ばれ新しい医風を起さんとする学術団体、成医学会が誕生した。

ここで設立が決定された成医会講習所は同年五月一日より東京医学会社の二階広間を借りて開講された。これが即ち東京慈恵会医科大学の濫觴である。成医会はいわば私塾の如きものであった。しかし辛苦辛酸の末やがて慈恵会医科大学となるのである。

「英語は世界語である。これを身につけていれば世界の文化を吸収し、また日本の文化を世界に向けて伝えることが出来る」というのが高木の確信であった。<sup>(四五)</sup>

英米医学に対する高木兼寛の考えは福沢諭吉と軌を一にするものであったが、ドイツ医学礼賛、学閥の甚しいこの狭い

日本の土壤に、英米医学を根づかせて行くことは想像を絶した難事であった。

ともあれ横浜に端を発した英米医学は慶応義塾医学所となり、やがて慈恵会医大となって戦後へと続いてゆくのであるが、この中でシモンズが果たした役割も、亦決して少くなかったことと筆者は考えている。事実、明治期日本に於ける英米医学の流れは、常にシモンズとの交遊をもった人達によって成されて来たのである。

シモンズが亡くなった時、明治二十二年二月二十七日の時事新報に吊慰会と題して次の文章が見られる。

「東京成医学会会員は去る十九日芝三田の寓居に於て死去せしドクトル・セメンス氏の為に本日午後七時より宗十郎所なる大日本衛生会の会堂にて吊慰会（てい）を催しドクトルと交誼のある人々を招く筈なり（四六）といふ。」とある。シモンズの成医学会の深いかかわり合いを読みとることのできる文面である。

シモンズが成医学会の会員や役員にならなかったのは帰国を決議していたからではなからうか。因にシモンズが十全医院を辞したのは明治十三年三月であり、成医学会成立の前年である。そのため成医学会の結成にも参加しなかったのではなからうか。

しかし在日中シモンズは常に成医学会の人々と強いつながりを持っていたのである。

かくて日本における英米医学の流れの中で、シモンズの果たした役割は大きくはなかったかも知れないが、必ずしも少くはなかったと筆者は思うのである。

## 帰 国

名医のほまれ高かったシモンズは幾多の業績を残して明治十三年三月十全医院の職を辞した。横浜開港五十年史は次のように述べている。

「十三年三月セメンス職を辞し、後、蘭人ブツケマン、英人ボエーラー、米人エルドリツジ相繼いで治療主任となり明

治二十二年まで院長と称するものなかりし。セモンズは内外共に精研せる名医にして、その勤務中開業医の難治の大患とせる病者を診療し、治療上に私益を与えたること少からず、退職に際し勲五等双光旭章を賜はる」と。

シモンズは皇恩の厚きに感謝したことであろう。かくして、こよなく愛した日本を離れて母国に帰ることとなったのである。

いつ日本を立ったのかは明らかではないが、明治十五年二月十六日の日附で紅海の船中から福沢諭吉に宛てた書翰がある。その全文を次に掲げよう。

ドクトル・シモンズ書翰

(明治十五年二月十六日)

小生は印度の遊歴を終り漸く歐洲に至らんと致居候。印度の遊歴は実に小生が生涯の樂事に有之候。其際幾度か君を懐ひ、又幾度か小生が愛着する日本國を思ひ出で候。小生は只管君と手を携へ共に此樂遊を為さざりしを遺憾に存候。出立の際は參館別辭を叙るの暇無之失敬致候。日本は小生の為に、第二の故郷に有之候。此故郷の朋友を後に遺し遠く相別るゝ小生心中の煩悶は御推察被下度候。何卒今年の末か来年始迄には歸來再び拜眉を得度存候。

此度印度遊歴中には十分其人民に近接し、日本人と印度人とを比較するの好機會を得申候。日本は印度に比するに一個の極樂國なりと小生敢て断言致候。印度には富豪大家なきに非ずと雖ども、人民の大部分は極貧卑汚の者に候。其生活の有様は人間に近しと云はんより寧ろ獸畜に類すると云はん方適當なるべし。其住宅は各地方とも大概日本の小百姓の家に有る馬小屋に等し。否、此馬小屋にも劣るものに候。人民は遊惰不學にして無稽荒唐の説に惑溺せり。徳行に於ても智力に於ても日本人に及ばざること万々なるは勿論、北方諸州の人民の外は、一身の体格に於ても遙に日本人の下に位し居り候。印度人中にても學識ある者共は大に日本に注意し、日本の進歩竝に其独立自治の有様を聞き、何様の手段を以て斯る驚嘆すべき事業を成し得るやを聞まほしく熱心致居候。又日本の美術をも痛く賞歎羨望致居候。

小生はボンベー政府の衛生局にて西京火葬場の様子を話したるに、同局に於て右火葬爐の図面を得度旨懇望有之候。君

若し京都府知事に依頼し右函面を同局へ御送致被下候事を得ば幸甚なり。表書は左の通にて相届き申候。

印度ボンベール府衛生局行

小生の健康も益々旧に復し相喜居候。呉々も申上候は何卒時々御状御遣し被下度、肩書は

米國紐育州モントゴメリ郡フォンダ町にて

と御認め被下度候。

小生日本出立以来未だ何方よりも書状到来致し不申、何卒して日本よりの新聞紙を得、其後東京の景況を承知致度熱望致居候。

小生出立前チャパンメール新聞に君の小伝と君が最後の御著述書の抄訳とを記載致し有之候。定めて疾く御一覽の事と存候。

摺筆に臨み呉々も御依頼申上候は、必ず時々御地の模様御報道被下度、小生も怠りなく御書通申上候積に候。早々頓首。紅海船中にて。

千八百八十二年二月十六日　ゼー・ビー・シモンズ

福澤諭吉君　坐下

(明治十五年五月二十日時事新報雜報)

日本を第二の故郷といい朋友を残し、遠く相別るる悲哀を切々と訴えて読む者の胸を打つ。

シモンズの人柄を彷彿とさせてくれる一文であり、また、福沢との交遊を示す文献でもある。

福沢の病気を治療して以来の両者の交遊内容を伝える資料は殆ど無いが、この文面のみを限り福沢との親交は想像以上のものであったように思われる。

慶応義塾医学所の開設にあたり論吉の頭の中にシモンズが存在したであろうとする筆者の推論は、実はこの文面に依るのである。

印度ボンベ―府衛生局を尋ねて火葬場の話をしたり、右京火葬爐の図面を論吉にボンベ―府に送るよう依頼しているあたりは、シモンズの面目の躍如たるものがある。論吉もこれに応えたことであろう。ともあれ、シモンズは再びの来日を胸に抱きながら、母国アメリカを指す船上の人となったのである。

## 文 献

- (一) 原田 彰 湘房雜記 原田教授就任二十周年記念刊行委員会
- (二) 荒井保男ほか編 草創のころ―横浜市立大学医学部創立史― 横浜市大医学部同窓会俱進会・昭和五十九年
- (三) 小川三郎 日本プロテスタント史研究 東海大学出版会 一九六四年
- (四) 慶応義塾編纂 福沢諭吉全集第二十卷 昭和三十八年
- (五) 高谷道男編訳 S・R・ブラウン書簡集 日本基督教団出版局 一九六五年
- (六) 横浜ばなし 文久二年
- (七) 長崎医学百年史 昭和三十六年
- (八) 横浜市十全医院要覧 昭和八年
- (九) 太田久好 横浜沿革誌 明治二十五年
- (一〇) 東京日日新聞 明治五年壬申五月 一八七二年六月十四日発行
- (一一) 横浜商業会議所編 横浜開港五十年史(下巻) 名著出版 昭和四十八年
- (一二) 読売新聞 明治八年九月十五日発行
- (一三) 郵便報知 明治十年九月三日発行
- (一四) 郵便報知 明治九年十一月三十日発行
- (一五) 読売新聞 明治九年七月五日発行
- (一六) 中外新聞 明治二年四月十六日発行

- (一七) 明治ニュース事典 第一卷 毎日コミュニケーションズ出版部 一九八三年
- (一八) 横浜毎日新聞 明治八年十二月十八日発行
- (一九) 読売新聞 明治八年十月二十八日発行
- (二〇) 時事新報 明治二十一年一月二十九日発行・同年一月三十日発行
- (二一) 大滝紀雄 かながわの医療史探訪 秋山書房 昭和五十八年
- (二二) 横浜毎日新聞 明治八年十一月十日発行
- (二三) 郵便報知新聞 明治十年九月二十日発行
- (二四) 朝野新聞 明治十年十一月十五日発行
- (二五) 郵便報知新聞 明治十一年十月十八日発行
- (二六) 朝野新聞 明治十二年八月三日発行
- (二七) 横浜史稿 産業編 昭和七年十二月
- (二八) 郵便報知新聞 明治十一年二月四日号
- (二九) 中西淳朗 横浜医学史異聞 神奈川県保険医新聞 第八三〇号 昭和六十年六月
- (三〇) 吉田清彦ほか編 藤沢医史 藤沢医師会 昭和五十九年
- (三一) ユネスコ東アジア文化センター編 資料御雇外人 小学館 昭和五十年
- (三二) 神奈川県医師会史 第一卷 神奈川県医師会 昭和五十二年
- (三三) 慶応義塾編纂 福沢諭吉全集 第十七卷 岩波書店 昭和三十六年
- (三四) 富田正文 考証福沢諭吉 三田評論 昭和五十七年十二月号
- (三五) 時事新報 明治二十二年三月一日発行
- (三六) 石川幹明 福沢諭吉伝 第一卷・第二卷 岩波書店 昭和七年
- (三七) 慶応義塾編纂 福沢諭吉全集第二十二卷 岩波書店 昭和三十九年
- (三八) 香取國臣 中川嘉兵衛伝 関東出版社 昭和五十七年
- (三九) 福沢諭吉・福翁自伝 講談社文庫 昭和四十六年
- (四〇) 医制五十年 内務省衛生局 大正十四年



- (四一) 北里文太郎 慶応義塾医学所(上・下) 日本医史学雑誌 昭和十七年十一月・十二月
- (四二) 鈴木要吉 松山棟庵先生伝 松山病院発行 昭和十八年
- (四三) 横浜毎日新聞 明治九年十一月二十日発行
- (四四) 東京日日新聞 明治十一年十月八日発行
- (四五) 東京慈恵会医科大学百年史 東京慈恵会医科大学発行
- (四六) 時事新報 明治二十二年二月二十七日発行
- (四七) 時事新報 明治十五年五月二十日発行

## The American Doctor, D.B. Simmons

—especially his achievements at Juzen Hospital (Yokohama) and his relation  
to Yūkichi Fukuzawa—

by

Yasuo ARAI

Duane B. Simmons, an American doctor, first came to Japan as a missionary for the Dutch Reformed Church in America in November, 1859 (6th year of Ansei). He came with S.R. Brown and G.F. Verbeck, and resided at Shukoji Temple in Kanagawa Prefecture. Initially he had worked as a missionary, but as his wife was an extreme Unitarian, he left his mission and became a doctor. He moved to Settlement No. 82 in Yokohama in 1862 (2nd year of Bunkyu) and Practiced medicine there.

In 1870 (3rd year of Meiji), on the recommendation of Verbeck he became a teacher at DAIGAKU

TOKO, the predecessor of the present School of Medicine, Tokyo University. However, when a German doctor came to Japan, Simmons resigned from his post. From 1871 on he worked as a foreign doctor at Yokohama Juzen Hospital, the predecessor of the present School of Medicine, Yokohama Municipal University, at a salary of 320 yen a month. He had been very active and was invested with full powers in medical treatment at the hospital as of 1876 (9th year of Meiji). He was skilled in curing syphilis, tuberculosis, eye diseases and in surgery. The citizens of Yokohama respected and loved him. They called him SEMENS in Japanese pronunciation, and wrote his name in Chinese characters, as 西門士.

His achievements as a doctor at Yokohama Juzen Hospital were enormous. The following are some major contributions:

1. Being excellent in dissection, Simmons demonstrated a dissection at the Juzen Hospital in 1875, giving proper guidance and a lecture to practicing doctors and medical students.
2. He also held an autopsy on a patient with beriberi, and discovered myocardial degeneration. He himself took a stand on the theory of infection.
3. When epidemics of cholera broke out in Yokohama in 1877 and 1879, he contributed a great deal in preventing their spread by taking proper precautionary measures.
4. In those days smallpox was often prevalent in the district of Yokohama, in fact it was epidemic in 1873 and 1874. At that time they made the Juzen Hospital the head office on the advice of Simmons, and built a new building in the hospital grounds, isolating the patients. Moreover, in order to prevent contagion, they vaccinated people in Kanagawa prefecture. They issued certificates to those who were

vaccinated, and this is said to be the beginning of the certification of vaccination against smallpox in Japan.

5. In treating Syphilis he used all his new knowledge and achieved great success.

6. Simmons is famous as the creator of SEMEN-EN, an insecticide (though there is a different view), which was widely known and used all over Japan.

7. He created a soap called ITCH SOAP. This is considered to be the first medical soap in Japan.

8. Encouraging Kahei Nakagawa to promote cattle breeding, and encouraging the drinking of milk is also one of Simmon's more notable contributions.

9. When Yukichi Fukuzawa, the founder of Keio University, was seriously ill with epidemic typhus fever and on the verge of dying in 1870, Simmons examined and treated him, thereby saving his life. Thus they became acquainted, and this led to Simmons moving to mita hill and publishing his views as a fighter for Nationalism in Japan.

10. Since the use of German medical practices was predominant in Japan, little was known about American-British medical procedures. With Simmons, help, however, they were introduced starting with Yokohama Juzen Hospital and then through the Keio University School of Medicine, SEII-KAI, and to JIKEI Medical College in turn.

Simmons left the Juzen Hospital in 1880 (13th year of Meiji) and went back to his home country, America.